



大阪北部(彩都)地域

岸本 忠三 本部長

「世界に顔が見えるようになりたい」

「基礎的な研究レベルで突出している必要がある。大阪は免疫に非常に強く、これをベースに感染症に対しても、最初に水痘ワクチンを作り、阪大微生物病研究会が製造しているという歴史がある。また、抗体医薬という面でも早くから着目してきた。抗体や、がんなど難病治療に新しい標的を、基礎的な研究で見つ

「環境としては阪大、医薬基盤研究所、国立循環器病センター、大阪バイオサイエンス研究所などがある。基礎研究、臨床研究と製薬企業とを結び付けるのが千里ライフサイエンス振興財団であり、知的クラスターの役割であり、ソフト面は整っていると思う。私が常に言うのは、薬を作るのに病気を知らないで、なぜ薬を作れるのかということ。海外の製薬会社ではトップに医者がおり、新しい薬を作るといふ発想がある。病気を知っている医者と薬を作る人はセットでなければいけない。阪大・医学部付属病院や循環器病センター、医薬基盤研究所のある彩都は近く、メリットは必ずある。製薬会社が利用しない手はないと思う」

「知的クラスター創成事業第Ⅰ期をどのよう

「知的クラスター創成事業第Ⅰ期の成果としては、例えば創晶というレーザーを照射してたんぱく質の結晶化を容易にするベンチャーができ、いくつもの企業がその技術を利用している。阪大の工学研究科から出たベンチャーで、大学の基礎研究が企業に役立っているというのは、知的クラスターの理想型であると思う」

「第Ⅱ期の目標は、

「知的クラスター創成事業第Ⅱ期は、第Ⅰ期をベースに、ある程度世界に顔の見えるようなバイオ

「基礎的な研究レベルで突出している必要がある。大阪は免疫に非常に強く、これをベースに感染症に対しても、最初に水痘ワクチンを作り、阪大微生物病研究会が製造しているという歴史がある。また、抗体医薬という面でも早くから着目してきた。抗体や、がんなど難病治療に新しい標的を、基礎的な研究で見つ

特質発揮し世界の耳目を

免疫、抗体薬などに可能性

オクラスタを作ることに。日本の中でバイオオクラスタといえは、このあたりという自負はある。ただ、仏・独・スイス、シンガポールなど海外にあるオクラスタに近

「環境としては阪大、医薬基盤研究所、国立循環器病センター、大阪バイオサイエンス研究所などがある。基礎研究、臨床研究と製薬企業とを結び付けるのが千里ライフサイエンス振興財団であり、知的クラスターの役割であり、ソフト面は整っていると思う。私が常に言うのは、薬を作るのに病気を知らないで、なぜ薬を作れるのかということ。海外の製薬会社ではトップに医者がおり、新しい薬を作るといふ発想がある。病気を知っている医者と薬を作る人はセットでなければいけない。阪大・医学部付属病院や循環器病センター、医薬基盤研究所のある彩都は近く、メリットは必ずある。製薬会社が利用しない手はないと思う」

日刊工業新聞 2007年9月25日付

「躍進する関西のバイオ産業」

の記事より転載許可を受けて掲載。

本記事の著作権は日刊工業新聞に帰属します。

本記事の改変、他への転載は、これを一切禁じます。